

文脈主義による無欠陥な不一致への応答とその射程
Contextualism's reply to faultless disagreement and its scope

檜岡寛己

Abstract

In this essay, I investigate how contextualism about predicates of personal taste replies to the criticism in terms of faultless disagreement, and whether that reply is successful. The criticism is that although contextualism can explain faultlessness, it cannot explain disagreement. But, it does provide some ideas to explain disagreement. After outlining these ideas, I consider whether contextualism successfully explains faultless disagreement, and I suggest that it does explain faultless disagreement in one interpretation but not in another.

(1) 研究テーマ

小論では、個人的趣味述語(predicates of personal taste;以下、ppt)の意味論の文脈主義(contextualism)が無欠陥な不一致(faultless disagreement)へどのような応答をもたらし、その応答が上手くいっているのかを探究する。

本論に入る前に ppt の外延をいくつか示したい。多くの論者は、「楽しい(fun)」、「美味しい(delicious, tasty)」のような主観的な述語を ppt の典型例だと見なす。本論では、「リンゴは美味しい」という文を、ppt を含む文のモデルケースに採用し、以降の議論を進めていくことにする。

2 節では、ppt の文脈主義、無欠陥な不一致、無欠陥な不一致によって文脈主義が抱える問題、文脈主義によるこの問題への応答を紹介する。3 節では、文脈主義による無欠陥な不一致への応答は上手くいっているのかを考察し、その応答はある意味では上手くいっているが別な意味では上手くいっていないことを示唆する。4 節では、今後の研究の展望を簡単に述べる。

(2) 研究の背景・先行研究

2-1.ppt の文脈主義

典型的な ppt の文脈主義は、ppt を含む文には趣味に相対化された隠れた指標的な構成要素が含まれていると考える(Cappelen&Hawthorne 2009)。話し手 A が「リンゴは美味しい」と発話したとしよう。この場合、その趣味は典型的には話し手のものであり、文脈主義によれば、話し手 A によるこの発

話が表す命題は《リンゴは A にとって美味しい》というものである。以上が ppt の文脈主義的な意味論である。2-2 では、無欠陥な不一致を見ていく。

2-2. 無欠陥な不一致

Kölbel(2004)によれば、無欠陥な不一致とは、思考者 A、思考者 B、命題（判断の内容） p が存在する以下のような状況である。

(a) A は p と信じ（判断し）、B は $\neg p$ と信じる(判断する)。

(b) A も B も間違いを犯していない（欠陥があるのではない）。

(Kölbel 2004: 53-54)

この定式では、(a)は不一致を表していて、(b)は無欠陥を表している。また、Zeman(2019)によれば、この定式には二つの特徴がある。一つ目は、(a)において、不一致は命題のみならず、信念ないし判断に言及する仕方で定式化されている。二つ目は、(b)において、欠陥の意味について説明がなされていない。一つ目の特徴に関して言えば、不一致に関する説明では、信念ないし判断という命題的態度は省略されて、話し手それぞれの発話が表す命題が両立しないというような仕方で説明されることが多い。二つ目の特徴に関して言えば、Zakkou(2019)によれば、二つの意味がある。一つ目は、ppt を含む発話によって表現される命題が真であると考えることが正当化されるために、話し手は必要なことをすべて行っているという意味での無欠陥である。二つ目は、話し手による ppt を含む発話が表す命題が真であるという意味での無欠陥である。

2-3. 文脈主義が抱える不一致問題

しかし、無欠陥な不一致に対して、文脈主義は話し手それぞれが無欠陥であることを説明できる一方で、話し手同士の間には生じる不一致を説明できないと言われてきた。以下の談話(1)を見てほしい。

(1)A と B は、以下のそれぞれの発話によって表現される命題が真であると考えることが正当化されるために必要なことをすべて行った上で、真剣かつ誠実に以下のようなやりとりをする。

A: 「リンゴは美味しい」

B: 「いや。リンゴは美味しくない」

文脈主義によれば、(1)における A と B のそれぞれの発話が表す命題は(2)のそれぞれとなる。

(2)A: 《リンゴは A にとって美味しい》

B: 《リンゴは B にとって美味しくない》

文脈主義によれば、(1)の談話では、A の命題と B の命題はどちらも真であると言えるだろう。そのため、文脈主義は、両者の発話が表す命題が真であるという意味で、A と B が無欠陥であることを説明できる。一方で、A の命題と B の命題は矛盾をきたすものではなく、両立する。そのため、文脈主義は不一致を説明できないと指摘されてきた(以下、このことを不一致問題と述べる)。

しかし、López de sa(2022)によれば、不一致には排除的内容が必要だとする考え方は明らかに不当な制限である。通常的不一致の概念はもっと柔軟であり、排除的内容を含む必要はないのだ。実際に、多くの文脈主義者が不一致をより柔軟に捉え、不一致問題に応答しようとしてきた。2-4 では、文脈主義による不一致問題への応答の一つとして語用論的内容に訴える説明を見ていく 1。

2-4. 文脈主義による不一致問題への応答

2-4-1. 優越性の前提

Zakkou(2019)は、ppt を含む文が優越性(superiority)の前提を語用論的に伝えると主張し、不一致問題に応答する。Zakkou(2019)によれば、優越性の前提とは、話し手がそれぞれ自分の趣味を相手の趣味よりも優れていてベストであると考えた前提である。そして、(1)のような談話において A も B も、(2)のような命題を意味論的に表しているだけでなく、優越性の前提を語用論的に伝える。結果として、(1)のような談話において、A と B によって伝達される語用論的内容は以下の(3)となる。

(3)A: 「リンゴは A にとって美味しいし、リンゴに関しては A の趣味の基準がベストだ。」

B: 「リンゴは B にとって美味しくないし、リンゴに関しては B の趣味の

基準がベストだ。」

優越性の前提の説明が正しければ、文脈主義は、(1)の談話において A と B はそれぞれ(2)の命題を表し、(3)の内容を語用論的に伝達していると説明する。そして、この説明では、A と B は、命題が真であるという意味で、共に無欠陥であり、語用論的内容に関して A と B の間に不一致が生じているということになる。

2-4-2.メタ言語的交渉

文脈主義は、不一致問題を説明するための別な仕方としてメタ言語的交渉に訴える仕方も提案してきた。Sundell(2011)、Plunkett&Sundell(2013, 2021)によれば、メタ言語的交渉とは、二人の話し手が、ある言語表現を用いて、その言語表現がある文脈ではどのように使用されるべきかをめぐる規範的な論争である。そして、メタ言語的交渉を用いて、文脈主義は、(1)のようなやりとりが(2)のような命題を表しながら、(4)のようなメタ言語的交渉もしていると考ええる。

(4)A:「A と B の文脈では、美味しいという語はリンゴに当てはまるような基準で用いられるべきである」

B:「A と B の文脈では、美味しいという語はリンゴに当てはまるような基準で用いられるべきではない」

メタ言語的交渉の説明が正しければ、文脈主義は、(1)の談話において A と B はそれぞれ(2)の命題を表しつつ、それぞれ(4)のようなメタ言語的な伝達をしているのであり、この伝達された語用論的内容で不一致が生じていると説明することができる。そして、この説明では、A と B は、命題が真であるという意味で、共に無欠陥であり、語用論的内容に関して A と B の間に不一致が生じているということになる。

(3) 筆者の主張

これまで、文脈主義による無欠陥な不一致への応答を見てきた。では、文脈主義のこれまでの説明によって、無欠陥な不一致は説明されたことになるのだろうか。私は、ある意味では無欠陥な不一致が説明されていて、また別な意味では無欠陥な不一致が説明されていないと考えている。では、それはどういうことなのだろうか。その説明のために、まずは Lowe(2006)による 4

カテゴリー存在論を簡単に導入したい。

3-1.4 カテゴリー存在論

Lowe(2006)は存在論の基本的なカテゴリーとして、対象(Objects)、様態(Modes)、種(Kinds)、属性(Attributes)の四つを導入する³。対象は個別の実体であり、そのカテゴリーには、この人間というような個体が属する。様態は個別的性質ないし個別関係であり、そのカテゴリーには、この壁の白さというような個別的性質、AとBの間の特定の友情関係というような個別関係が属する。種は実体的普遍者(substantial universals)であり、そのカテゴリーには、人間のような生物種が属する。属性は非実体的普遍者(non-substantial universals)であり、そのカテゴリーには、白いという普遍的性質、友情関係のような普遍的関係が属する。

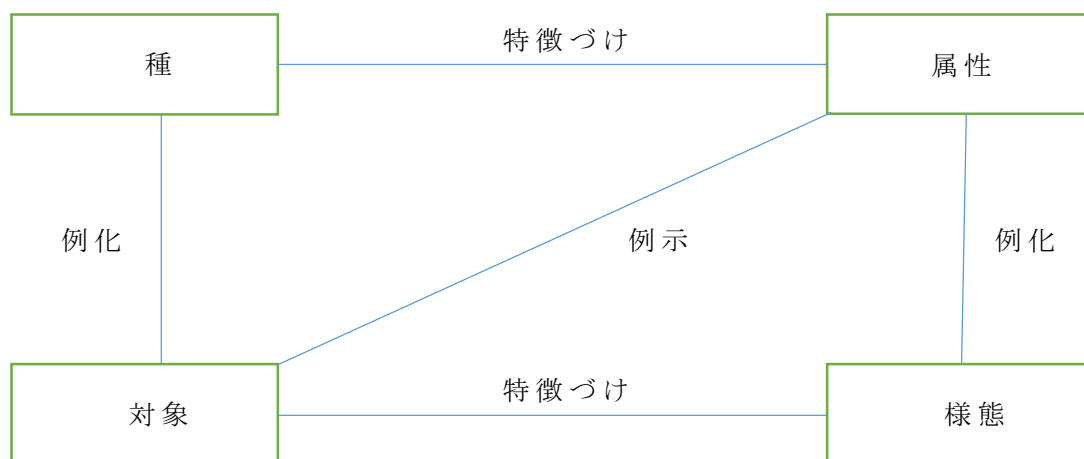


図 1. 存在論的スクエア

ここで示した四つのカテゴリーの間には例化(instantiation)関係、特徴づけ(characterization)関係、例示(exemplification)関係という三つの形式的関係が成り立つ⁴。例化関係は、種カテゴリーに属する存在者と対象カテゴリーに属する存在者の間に、また、属性カテゴリーに属する存在者と様態カテゴリーに属する存在者の間に成り立つ。例えば、人間という種は、メッシというような個別の実体に例化される。同様に、より背が高いという関係は、ロナウドはメッシより背が高いというような様態に例化される。特徴づけ関係は、種カテゴリーに属する存在者と属性カテゴリーに属する存在者の間に、また、対象カテゴリーに属する存在者と様態カテゴリーに属する存在者の間に成り立つ。例えば、後者なら、ロナウドとメッシはより背が高いという様態によって特徴づけられる。例示関係は、対象と属性の間に成り立つ。そし

て、例示関係は例化関係と特徴づけ関係によって定義づけられ、対象は様態を経由して属性へと例示関係に立つ 5。例えば、ロナウドとメッシはより背が高いという属性を例示する場合、ロナウドとメッシは実際により背が高いという様態によって特徴づけられ、より背が高いという様態はより背が高いという属性を例化するということになる。以上が、Lowe(2006)による 4 カテゴリー存在論の概要説明である。

3-2.無欠陥な不一致から得られる二つの命題への二つの解釈

Kölbel(2004)の無欠陥な不一致の定式は、A と B の判断の間に不一致がある(①)こと、A と B が共に無欠陥である(②)ことを表している。これまで、不一致は A と B の命題間に生じる不一致である(③)として捉えられてきた。無欠陥に関しては、両者の発話によって表現される命題が真であるという意味で A と B は無欠陥である(④)。また、不一致は語用論的内容での不一致である(⑤)とする文脈主義によるアイデアも考慮に入れて議論をする必要がある。

文脈主義では説明ができなかったところの無欠陥な不一致は、(①)、(②)、(③)、(④)によって説明され、次の(5)の 1 の命題が真であることにコミットすることになるだろう。一方、文脈主義が提示する無欠陥な不一致は、(①)、(②)、(④)、(⑤)によって説明され、次の(5)の 2 の命題が真であることにコミットすることになるだろう。

- (5)1.《A と B の発話によって表現される命題はそれぞれ真であり、これらの命題の間には不一致が生じている》
- 2.《A と B の発話によって表現される命題はそれぞれ真であり、両者の発話によって伝達される語用論的内容の間には不一致が生じている》。

ここで、3-1 の 4 カテゴリー存在論で示した対象と属性の間に成り立つ例示という形式的関係を考慮すると、無欠陥な不一致から導くことができる(5)の 1、2 にはそれぞれ、不一致関係と真であるという性質に関して成り立つ規則について、以下の 2 つの解釈の余地があるように思われる。

- 解釈 1.命題が不一致関係を例示し命題が真であるという性質を例示することが求められる。あるいは、語用論的内容が不一致関係を例示し語用論的内容が真であるという性質を例示することが求められる。
- 解釈 2.命題が不一致関係を例示し命題が真であるという性質を例示することが求められる、というわけではない。あるいは、語用論的内容

が不一致関係を例示し語用論的内容が真であるという性質を例示することが求められる、というわけではない。

3-3. 文脈主義は無欠陥な不一致を説明できるのか

3-2 で得られた二つの解釈を 2 節での文脈主義の説明に照らし合わせてみよう。また、Zakkou(2019)による無欠陥への説明を適切に拡張することで、両者の発話によって表現される命題が真であるという意味での無欠陥を、両者の発話によって表現される命題/語用論的内容が真であるという意味での無欠陥として言い換えられると仮定してみよう。すると、以下の①~④の説明が得られるだろう。

- ①.真であるという性質も不一致関係も二つの特定の命題に例示される(解釈 1 に適合する)6。
- ②.真であるという性質も不一致関係も二つの特定の語用論的内容に例示される(解釈 1 に適合する)。
- ③.真であるという性質が二つの特定の命題に例示され、不一致関係が二つの特定の語用論的内容に例示される(解釈 2 に適合する)。
- ④.真であるという性質が二つの特定の語用論的内容に例示され、不一致関係が二つの特定の命題に例示される(解釈 2 に適合する)。

2 節における文脈主義の説明を考慮すると、不一致関係は A による発話が伝達する語用論的内容と B による発話が伝達する語用論的内容に例示され、真であるという性質は A による発話が表す命題と B による発話が表す命題に例示されると言えるだろう。これは③にあたり、解釈 2 に適合する。したがって、文脈主義による説明では、真であるという性質を例示している対象と不一致関係を例示している対象が別である。そのため、文脈主義の説明では、解釈 1 を説明することができず、さらに解釈 1 はもともとの無欠陥な不一致から導かれる解釈であるはずなので、無欠陥な不一致が適切に説明されているとは必ずしも言えないだろう。

2 節での文脈主義の説明では、無欠陥な不一致の解釈 2 を問題なく説明できるようには思われるが、解釈 1 を説明できないように思われる。というのも、文脈主義の説明によれば、不一致関係と真であるという性質を例示する対象が同じではなく、別だからだ。文脈主義は不一致を意味論的に説明するのが難しいというこれまでの反論を考慮すると、①と④はあてにはできないので、本論が示すところによれば、無欠陥な不一致から導かれる解釈 1 を説

明するために文脈主義が取り得る戦略候補は②となるだろう。

(4) 今後の展望

註6でも示したように、相対主義は解釈1をうまく説明できるように思われる。そのため、相対主義が解釈2を説明できるのかを考察したい。その上で、もし相対主義が解釈2を説明できないのだとしたら、解釈1と解釈2を説明し尽くす理論を構築するのか、それとも相対主義と文脈主義を無欠陥な不一致に関する解釈によって使い分けるのかを探究したい7。また、これまでの議論を踏まえると、相対主義と文脈主義は無欠陥な不一致に関して異なる解釈に適う理論を組み立てたことになり、無欠陥な不一致に関して両者に論争はないと評価することができるかもしれない。さらに、文脈主義と相対主義は無欠陥な不一致というそもそもの現象をそれぞれ異なる現象に還元していて、どちらがもっともらしく還元しているのかが論争的になると考えることもできるかもしれない。これらは重要な論点であるように思われるので、これらについても探究したい。

註

1. 語用論的な応答には López de Sa によるアイデアをはじめとして多くあるが、紙幅の都合により、本論では 2-4 の二つのみをあげる。

2. メタ言語的交渉を意味論的に説明する余地もある。詳しくは Zakkou(2019)、Plunkett&Sundell(2021)、小田(2021)を参照してほしい。しかし、Plunkett & Sundell (2013)がメタ言語的交渉は語用論で説明されると考えていること、Plunkett & Sundell(2021)でもメタ言語的交渉は語用論で説明されると考えることを否定していないことの二つを理由に、本論では、メタ言語的交渉は語用論で説明されるものとして仮定している。

3. Lowe(2006)の解釈やその説明の仕方は倉田(2017)を参考にした。

4. 訳語は倉田(2017)を参考にした。

5. 本論では触れないが、対象が種を経由して属性へと例示関係に立つ仕方もある。

6. 文脈主義が対立する相対主義(Relativism)はまさにこのような説明をすることができるように思われる。相対主義による意味論には三平(2019)が詳しい。

7. この点は飯川遥氏に負う。

(5) 参考文献

- Cappelen, H & Hawthorne, J, 2009, *Relativism and monadic truth*, Oxford University Press.
- Kölbel, M, 2004, "Faultless Disagreement.", *Proceedings of the Aristotelian Society* 104, 53-73.
- López de Sa, D, 2022, "Disagreements and Disputes About Matters of Taste.", in *Perspectives on Taste Aesthetics, Language, Metaphysics, and Experimental Philosophy*, edited by Jeremy Wyatt, Julia Zakkou and Dan Zeman, Routledge.
- Lowe, E. J, 2006, *The four-category ontology: a metaphysical foundation for natural science*, Oxford Clarendon Press.
- Plunkett, D & Sundell, T, 2013, "Disagreement and the Semantics of Normative and Evaluative Terms." *Philosopher's Imprint* 13, 1-37.
- , 2021, "Metalinguistic Negotiation and Speaker Error.", *Inquiry* 64, 142-167.
- Sundell, T, 2011, "Disagreements About Taste.", *Philosophical Studies* 155, 267-288.
- Zakkou, J, 2019, *Faultless Disagreement: A Defense of Contextualism in the Realm of Personal Taste*, Klostermann.
- Zeman, D, 2019, "Faultless disagreement.", in *The Routledge Handbook of Philosophy of Relativism*, edited by Martin Kusch, Routledge.
- 小田拓弥, 2022, 「メタ言語的交渉をめぐる研究について」, *科学哲学* 54 (2), pp. 93-111。
- 三平正明, 2019, 「相対主義意味論の可能性」, *日本大学文理学部人文科学研究紀要* 97, pp. 1-30。
- 倉田剛, 2017, 『現代存在論講義 I』, 新曜社。

(無所属)